

令和7年度 学校自己評価システムシート （学校法人狭山ヶ丘学園 狭山ヶ丘高等学校附属中学校）

目指す学校像	21世紀を担う知勇兼備のリーダーの育成を目指す
--------	-------------------------

重点目標	1 教科指導の徹底と学力向上 2 基本的生活習慣の徹底 3 対話を重視し個々の人格を尊重した指導
------	--

達成度	A	ほぼ達成(8割以上)
	B	概ね達成(6割以上)
	C	変化の兆し(4割以上)
	D	不十分(4割未満)

出席者	学校関係者	16名
	生徒	0名
	事務局（教職員）	4名

学 校 自 己 評 価							
年 度 目 標					年 度 評 価（6月1日現在）		
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策
1	- 生徒が主体的に学ぶことができる授業への取り組みを更に充実させ、全員の学力向上を目指す。ゼミ、放課後の小テスト等を定期的に行い、確実な基礎力を定着させる。 - 全体的な学力の向上は見られるが、一部の生徒については学力差が大きく広がった側面がある。	- 全国レベルの模擬試験を通じて学力の推移を見守る。 - 定期考査の結果やその変化に着目。 - スタディサプリの活用状況に着目。 - 担当教諭とのコミュニケーションに着目。	- 曜日ごとの小テストを通じて生徒に自学自習の習慣を定着させる。 - 学習の進め方指導や苦手教科の克服指導に工夫を凝らす。 - 学習方法の定着していない生徒に対して、放課後、自習室での学習指導を展開する。 - 英検の受験を促して、対策講座を通じて合格者の増加を図る。	- 模擬試験のG T Zの推移。 - 定期考査の結果や共通英単語・漢字テストの状況。 - 英検の合格者数の推移。	- 模擬試験の各学年の平均点偏差値の上昇やG T Zの推移をみても全体的な学力向上はうかがえる。 - スタディサプリの活用には個人差が大きく出た。 - 英検の受験は多くの生徒がチャレンジしており、合格者も出ている。	B	- 学習が苦手な生徒同士が切磋琢磨しつつ相互に自己を向上させることができるような指導をより意識する。 - 自習室でのスタディサプリの活用を具体的に指導する。
2	- 概ね素直な生徒が多く、登校状況、出席状況は良好であるが、時折夜更かしをする生徒が散見される。 - 周囲への配慮を欠く言動がトラブルに発展するケースもある。	- 交通ルールやマナー、校則が守られているかに着目する。 - 生徒間のコミュニケーションの状況に着目する。	「生活の記録」を活用し、生活習慣を担任が把握。必要に応じた指導を展開する。 - 生徒間のコミュニケーションに問題があれば早期に指導する。	- 時と場所に応じて適切な言動が取れるかどうか。 - 挨拶の定着度。 - 規則正しい生活が出来ているかどうか。	- 学習の時間を確実に取れる生徒が増加している。 - 挨拶をしっかりと行う生徒が増えている。 - 公共の交通機関スクールバスでのマナーには課題が残る。	B	- 自己の意見を他者に主張できない生徒に対する継続的な指導を展開する。 - HRなどの活動のなかで各種マナーに対する意識を向上させる。
3	- 面談やHR活動、総合的な学習の時間、道徳の時間等で生徒理解を深めている。今年度も更に生徒理解を深め生徒指導に当たる。 - 黙想等の自己観察を通して、自己を省みる習慣を身につけさせる。	- 日常の学校生活における言動に着目する。 - 黙想後の発表の内容に着目する。	- 進路ガイダンスなどを通じて中学生が「学ぶ」意義について考察させる。 「キャリアパスポート」で各学年を振り返り、担任とのコミュニケーションを通じて自己研鑽を積ませる。 「生活の記録」を生徒指導に適切に活用する	- 教科学習以外の取り組みに対しても主体的、前向きに参加できているか。 - 生徒が協働性をもって学校生活に臨んでいるか。	- 体育祭、文化祭などの行事や農作業、日常的なグループワークなどでは協働して取り組む様子が多くみられた。 - 生徒間のトラブル	B	- 学年を超えたグループでの議論の機会を通じて、コミュニケーション能力の向上を図る。 - 周囲への配慮に対する価値を生徒に認識させる。

学 校 関 係 者 評 価	
実施日	令和8年7月4日
学校関係者からの意見・要望・評価等	
- 校内の対策講座だけではなく、英検の受験そのものへの申込みを促す取り組みを強化すべきではないか。 - スタディサプリの活用について、子供まかせでは積極的に活用することへの困難さがあるように感じる。	
- 友人との良好な関係を築き、学校生活が充実している部分はあるが、宿題よりも遊びを優先する傾向がある。 - オンラインで友人とゲームをすることが多く、指導が難しい。学校でも取り組んでもらいたい。	
学年の垣根を超えた取り組みに関しては継続的に実践してもらいたい。他学年の生徒と対話を通じて成長が促される側面がある。	